

南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
インドネシア語同窓会

2014年春 第18号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 Fax 072-753-1693

Email rocky3@wombat.zaqa.ne.jp

アチェ大地震災害 自衛隊支援に参加の 体験記

道広 健吾 (1961卒)



まず初めに、簡単に自己紹介させていただきます。外大を卒業した1961年丸紅に入社、木材部配属。63年フィリピン・マニラ支店(深田祐介著「炎熱商人」を経験)、65年マレーシア・サバ州サンダカン出張所の初代駐在員(山崎朋子著「サンダカン八番娼館」で名が知られた)を勤め、70年ジャカルタ支店勤務。4年間原木の対日輸入と鳥も通わぬ孤島での森林開発業務に。83年東マレーシア支店長(サバ州コタキナバル)、88年東京本社石油製品部長、91年マレーシア・クアラルンプール支店長を経て94年丸紅保険センター(株)常務、そしてエムアイシーサービス取締役社長となり2002年退社。従って海外駐在は東南アジア延べ18年間でした。



さて、本題に入ります。2004年12月北スマトラ沖で発生したM9に及ぶ大地震とそれに伴う大津波はアチェ州を中心に死者・行方不明者23万人を超えたと報じられました。日本政府は自衛隊部隊900人とそれを支援するJICAからなる国際緊急援助隊を編成してアチェに派遣、復旧支援に乗り出しました。私はこの緊急援助隊に2005年2月15日から3月1日まで2週間の参加要請を受けました。時が経っても体験した記憶は鮮明に残っており、この機会に実情をお話します。

《炎天下で》派遣された自衛隊部隊の活動内容は、医療・防疫・物資輸送に分かれ、国際緊急援助隊の我々通訳要員は自衛隊チームの医療・防疫活動が円滑に進むようサポートすることだった。宿舎は借家の民家である。毎朝6時前に起床(土曜・日曜の休みなし)すると、貯めた雨水でシャワーを浴びる。朝食後7時30分JICAのジープで出発。外科専門の診療所(1日平均20人の患者)を経て内科診療所に向かう。午前9時前、驚いたことに、すでに40人ほどが待っている。時間とともに患者数は増え続け、ピーク時の10時頃には約80人に達する。気温35度を上回る炎天下。テントの中で辛抱強く待っている。1日平均150人から200人。担当の自衛隊医師4人と我々通訳5人は、毎日実に忙しく患者と接し、トイレに行く暇もないほどだった。

内科の患者の病状は千差万別。津波に遭った恐怖感による精神的症状(頭痛など)、津波に飲み込まれたことによる腹痛、呼吸困難、咳、皮膚のかゆみや爛れ、背中や腰の痛み…。しかし、患者たちは治療を終え、薬を受け取り、次々満足げな顔をして「ありがとう」と帰っていく。その後ろ姿を見ると疲れが吹っ飛び、心が和らぐ思いがしたものだ。

診療時の通訳には医学専門用語が多く、しばしば辞書で確認しました。皆さん方、インドネシア語をどの程度思い出されるでしょうか。単語の一部をご参考までに挙げてみます。

鼻水 ingus 目まい pusig 下痢 diare, menceret 痺れ kebas, kesemutan くる pegal だるい lemas 胃腸炎 sakit maag 痒い gatal 動悸 berdebar-debar 不安感 rasa cemas, gelisah 結膜炎 radang selaput mata 捻挫 terkirir 抗生物質 antibiotik 副作用 efek samping.



《バンダアチェでの貴重な生活体験》

当時、アチェ州ではインドネシア政府軍と「アチェ独立運動」との紛争により文民非常事態宣言が発令されていた。個人的に宿舎から外出しなかったし、診療所では警護の警官(写真④)が配置され途中の車にも同乗したが、幸い身の危険を感じたことは1度もなかった。

我々の宿舎に関しては当初、安全のため自衛隊艦船での宿泊が検討されていた。しかし、民間人に対する機密保持もあり、結局 JICA が現地で借り上げた民家での宿泊に決まったのだ。この大きな民家は築 20 年以上のかなり古い木造 2 階建て。1 階に寝室 4 部屋、そのうち家主の家族が 3 部屋を使用し、残り 1 部屋が私に割り当てられた。2 階は共同トイレと水浴場付き部屋が 5 部屋あり、この部屋に我々の前に活動していた JICA 第 1 陣派遣員 40 人の男女が床を含めてゴロ寝の宿泊をしたと聞いた。

以前にアチェに滞在した延べ 100 人以上の JICA 派遣員のうち 3 分の 2 が下痢・熱中症などを訴えたという。それは炎天下でのハードワークと現地の食事・水なども原因だろうが、それに加えて不自由な生活環境でのストレスも影響したのではないかと感じた。

アチェ州はジャカルタと異なりイスラム規律が非常に厳しく、ビールなどアルコール類は一切御法度。もちろん町にも売って

からかぶる。典型的な田舎のインドネシア方式である。私の場合は、30 年以上も昔のインドネシア駐在時代に木材開発の僻地で何度も経験している。寧ろ懐かしい思いをしたものだ。ところが今回、同じ宿舎では共同生活している数人の 30 歳前のお美貌の女性海外協力隊員がいた。その彼女らは、全く平気だった。よく訓練されているなあと感服した。ただ、宿舎にはもちろんクーラーもなく、ハマダラ蚊(マラリア)の侵入に備え、昼夜共に戸も窓もしっかりと閉じられている。部屋の中のムンムン蒸し暑さに、寝苦しく閉口した。

通信関係では、当時アチェと日本との一般電話は一切通じない。日本の新聞・雑誌も手に入らない。滞在中、日本で何が起きているか分からなかったが、これも仕方ないことだった。

《結び》アチェでの生活自体は味気ないものであったが、大きな救いはこの 2 週間、若い男女の青年海外協力隊の人達と同じ釜の飯を食って共同生活をしたことで、彼らの生き生きとしたエネルギーを吸収させてもらった。また、彼らの献身的な活躍を目の当たりにし、近頃の若者も捨てたものではないと感心させられたことであった。今後、他地域でもさらなる活躍を期待したい。

最後に述べておきたいのは、アチェまでずっと行動を共に

してくださった看護師の存在だ。僻地で何でも相談出来るという安心感が、目に見えないファクターとなって我々が仕事に熱中できたことは確かであった。宿舎の食事面でも何かと健康管理に気を使っただき、ありがたかった。そして私自身、灼熱の厳しい環境の中で微力を尽くせた。自衛隊医療部隊の支援に少しでもお役に立てたと自己満足しながら帰国した次第だ。

帰国後、当時の JICA 緒方貞子理事長から感謝状授与の連絡があり、謹んでお受けした。



④次々と訪れた患者達は辛抱強く待つ ⑤右側の自衛隊医師は患者のカルテをパソコンで作成

いない。宿舎の主人も敬虔なイスラム教徒なので、ここは我慢のしどころだ。お陰様で帰国後の身体検査では、肝機能は全く異常なしだった。

宿舎でのお風呂は当然お湯が出ない。水浴である(写真⑥)。トイレに使う、その横に貯めてある濁った雨水・井戸水を柄杓で汲んで頭



寄稿

Apa & siapa

インドネシア語が 教えてくれたこと

野村 知代 (2012 卒)

「野村さん、いつインドネシアの駐在員になるの？」インドネシアのローカルスタッフ、駐在員、はたまた同期からも、この言葉をかけられるたび、私はインドネシア語を専攻して本当に良かったと感ずることが出来ます。

2012年4月、私は大学を卒業後、日野自動車(株)に入社、インドネシア日野製造(PT. Hino Motors Manufacturing Indonesia [HMMI])の製造部門の窓口として仕事をしています。幼い頃から「日本と海外の

架け橋
になり
たい」と
いった
漠然と
した夢



を抱いていましたが、いま着実にその夢の実現に向けて歩いていることが自分でも少し信じられません。

高校時代はずっと別の大学を志望していた私でしたが、センター試験で思うような点数がとれず、志望校の変更を余儀なくされました。その時の「マイナー言語を勉強した方が、希少価値があるんじゃないか？」という担任の言葉と、「日本と繋がり強い国の言語を専攻したい」という理由から、大阪大学外国語学部 インドネシア語専攻へ入学を決めました。そして今、この決断が本当に正しかったと実感しています。

在学中は留学をすることもなく、3年生以降は授業への出席率もまらずで、初めてインドネシアを訪れたのは、卒業まであと半年に迫った4年生の11月でした。「せっかくだから、専攻語を生かしたい」といって就職活動をしていましたが、正直なところ、本当にインドネシア関係の仕事ができるとは思っていませんでした。

現在の仕事では、インドネシア語を使うことはあまりありません。現地とのメールは英語、会議は通訳を通じて日本語で行われます。しかしながら、日本人が私だけしかいない時のメールや電話、通訳者不在により私が通訳の代わりをしなければいけない時、休日の



アテンドなどではインドネシア語を使います。ローカルスタッフもやはり母国語であるインドネシア語の方が話しやすいようで(英語だと、インドネシア語なまりの英語と日本語なまりの英語、ノンネイティブ同士で会話しづらいといった側面もありますが)英語ではなくインドネシア語で話しかけてくれます。

入社して1年も経たないうちに、新人研修中だったにもかかわらず、ローカルスタッフの間で、私がインドネシア語を話せるという噂が独り歩きしました。「ノムラさん」はたちまち有名人になり、プライベートの誘いも増えました。仕事内容のせいもありますが、最近ではローカルスタッフの間で「困ったときはノムラさん」と言われるようになりました。まだまだ未熟な私ですが、本当に有難いことです。インドネシア語がただのコミュニケーションツールとしてだけでなく、私と彼らの心を繋いでくれています。インドネシアの言葉、人々をこんなに好きになれるとは、大学入学時には思ってもみませんでした。



もうすぐ、入社3年目になります。知識と経験の乏しさ故に、任されている仕事の量、内容とのギャップに苦むことが多々あります。昔を振り返っては、(インドネシア語に限らず)「もっと勉強すれば良かった」とか「学生しかでき

ない、いろんなことをしてみたかった」と思うものです。でも、人生はまだこれからです。全ては自分次第で、様々なことにチャレンジできると信じています。数年後、自分が何をしているかは全く想像つきません。

転機はいつ、どのように訪れるかわかりませんが、今までがそうであったように、どんな時でも自分がその時に思う「ベスト」を尽くしていこう、と考えています。

(写真は全て HMMI 関連。㊤出張中の Kota Tua で=中央が筆者=2013年9月、㊦出張時の会議=同8月、㊧HMMIの飲み会=同11月)



キャンパス便り

言語文化研究科 准教授 原 真由子

(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

語劇祭

例年は、豊中キャンパスの学園祭「まちかね祭」に合わせて、箕面キャンパスで語劇祭が行われますが、今年度（2013年度）は施設工事の関係で、豊中キャンパスの学生会館で、また学園祭の時期とも異なる11月16日（土）、17日（日）に行われました。インドネシア語専攻は、2年生が中心となり、“Bawang Merah Bawang Putih”という、シンデレラの話しによく似たインドネシアの継子いじめの物語を上演しました。

Bawang Merah とは意地悪な継母の連れ子である、やはり意地悪な姉妹のことで、Bawang Putih は彼女らに虐げられている娘のことで、彼女らの間のいじめの場面が多いのですが、最初はどうしても「手加減」してしまい迫真さに欠けていました。しかし、練習を重ね声色や身振りを工夫して大胆に演技していました。

インドネシア語スピーチコンテスト

阪大インドネシア語専攻からは、11月30日（土）に実施された神田外語大学主催のスピーチコンテストに1人参加。グループA（インドネシア語学習歴2年以内の大学生）の部に出場した2年生の野尻優子さんです。彼女は、高校時代から続けている少林寺拳法について話し、それを通じたインドネシアとの交流を深めたいと主張しました。グループ2位を獲得しました。

講演会

1月21日（火）に、オランダ王立言語地理文化研究所・上級研究員のWillem van der Molen先生（言語文化研究科に特別研究員として約1ヶ月滞在）をお迎えし、講演会を開催しました。講演は、「コサシのコミックに描かれたラーマとシンタの物語」と題し、70年代頃インドネシアで販売され人気があったコサシ氏作の



ラーマ・ヤナのコミックを分析した結果を発表されました。現在イスラム教が大多数のジャワにおいても、インドヒンドゥー叙事詩ラーマ・ヤナやマハーバーラタは文化に根付き、影絵芝居

2013年秋の語劇祭、熱演舞台の1シーン



また、今回使用した台本は、比較的口語的なインドネシア語で書かれており、それがむしろ難しく感じたようです。留学生との会話やメールなどを通して少し触れることはできますが、普段の授業では基本的にフォーマルなインドネシア語を学んでいるので、口語体の方が不慣れです。この機会を通して、状況や聞き手の違いによって様々なインドネシア語のスタイルがあることがわかったと思います。

箕面市と 連携講座

「インドネシアの“今”」



2月1日（土）、箕面キャンパスで、箕面市と外国語学部との共催で、インドネシア語専攻の学生が、市民を対象にインドネシアでの体験や学んでいることを紹介する催しが行われました。卒業論文の内容や現地インターンシップの経験を発表しましたが、インドネシアについて学生よりもはるかにたくさんの知識や経験をもった参加者もあり、するどい質問やコメントに学生はタジタジになっていました。学生にとって、大学での勉強がどのように社会で役に立つのか考える良い機会となり、市民の方々にもインドネシアを身近に感じて頂くことができました。

ワヤンをはじめとする伝統芸能を通して親しまれていますが、コサシ氏の作品によって物語の理解を深めたという人たちも多いと言われています。Molen先生は、コサシのラーマ・ヤナには、「混乱」「表裏一体（善悪など）」「クジャウエン（ジャワ神秘主義）」などの主要なコンセプトがあり、特定の宗教を越えた、普遍的な世界観が読み取れるという持論を展開されました。同じくコサシ作品を研究されている福岡先生や、学部生や留学生からも質問やコメントがあり、活発な議論がなされました。

《海外研修①》 カップリングインターンシップ プログラム(CIS)

(原 真由子)

平成25年度から、阪大接合科学研究所(接合研)と言語文化研究科(外国語学部)が主体となり、文部科学省の特別経費プロジェクト事業に採択された「広域アジアものづくり技術人材高度化拠点形成事業」の実施を開始しました。その事業の柱の1つが、「カップリングインターンシッププログラム」であり、本学の理系・文系学生各2名、現地大学の理系・文系学生各2名の合計8名をカップリングさせ、アジア地域の現地日系企業で研修を行うことで、グローバルな人材育成を目指すというものです。

平成25年度はタイ、ベトナム、インドネシアで実施しました。インドネシアの場合は、インドネシア大学と共同し、研修先としてコマツ・インドネシア(写真⑤)にご協力頂きました。時期は8月18



日～31日の2週間。最初はインドネシア大学で事前研修を行い、残りは文化体験も挟みながら、同企業で工場見学や事業説明などを踏まえもって与えられた課題に取り組み、最終的に経営陣に成果報告をするというのが大まかな内容です。参加者は、インドネシア大工学部の男子学生2人、日本語専攻の女子学生2人、阪大工学研究科の男子学生2人、インドネシア語専攻の女子学生2人という、専門分野と言語・文化が異なる2つの意味での「カップリング」であり、これが一般のインターンシップにはない特徴です。2つのチームに分かれましたが、案の定どちらも言葉は勿論のこと、考え方や知識の上でメンバー間でギャップがあり、コミュニケーションに苦労していました。しかし、2週間ずっと行動を共にし、根気強く意思疎通をはかることによって、仲間意識が芽生え、少しずつ困難を克服していきました。現在も、両大学の学生は、製造業をはじめとするグローバル企業に就職する割合は高く、このプログラムを通じ、就職後それぞれが直面するであろう問題を実感し、将来の進路に役立つ体験ができたと思います。また、有り難いことに、お忙しい合間をぬって、同窓会ジャ

カルタ支部の方々に夕食会を開いて頂き、学生たちにインドネシアで働く経験をお話し下さったことで、彼らの視野をさらに広げることができました。

《海外研修②》 ジャカルタ・ジョグジャ 海外実習

(菅原 由美)



2013年9月19日(木)～28日(土)にジャカルタ及びジョグジャカルタにおいて海外実習を行いました。19日の夜にジャカルタのチュマラ・ホテルに集合し、20日にOBの内原正司さん、辻和克さんのご案内によりタンゲランの東レ工場を見学、夜にはスディルマンでOBの皆さんと懇親会を行いました。21日は、コタの旧市街を見学。22日朝にガンビルからジョグジャカルタへ向けて列車で出発しました。

ジョグジャカルタではUGM内の2軒のゲストハウスに別れて宿泊し、23日は開会式、24日はUGMの歴史学科の学生と、各国の「第二次世界大戦についての小中高での教育方法」についてディスカッションをしました。夜には、ゲストハウスでUGMの学生とともに、サユール・アサムなどのインドネシア料理を作って食べました。25日はディスカッションの班ごとに別れてジョグジャの街中を散策し、26日はバスでイモギリ、コタ・グデ、ボロブドゥールを見学し、最後にプランバンでラーマヤナ・バレエを鑑賞しました。27日はUGMでお別れ会、28日にジョグジャカルタを出発、その日の夜にジャカルタを出て、帰国しました。



今回、全行程参加した学生は1年生13人全員と2年生3人ですが、途中参加や留学中合流してくれた参加者を合わせると、参加者はジャカルタで25人、ジョグジャで20人となりました。日程が詰まっっていて、途中体調を崩す学生も出ましたが、なんとか無事に皆帰国することができました。ご協力いただきましたOBや留學生の方々、本当にありがとうございました。



変貌続ける巨大な街

おとめ
乙咩 宏 (1993 卒)

1993年に大学を卒業し、倉庫会社へ入社、国際物流の仕事に就いて20年間一貫してサラリーマン生活。波乱万丈とは無縁、結婚し2子を設け、ここまで呆れるほど平凡な人生を歩んできました。果たして人様に読んで頂けるようなものになるかどうか心配なのですが、どうぞ宜しくお付き合いください。

さて、小生とインドネシアの関わりですが、入社後5年目1998年から2004年までの6年間駐在員としてジャカルタに赴任していました。そして、今回2度目で9年のブランクを経て2013年5月に再度赴任、今に至っています。

最初の駐在を始めた1998年は、ちょうどスハルト大統領が退陣した年でした。その後ハビビ、ワヒッド、メガワティと大統領がコロコロと変わって行った時代。そして今回の駐在はユドヨノ大統領の長期政権が終焉を迎えようとしている時期にあたります。

9年間の時を経て、久しぶりに見たインドネシア。こちらでお会いする方々にも「昔と変わったでしょう。どんなところが変わったと思いますか？」と度々聞かれることがありまして、この間については常々気に

かけて考えてみるのですが、変わったような、変わっていないよう



な。確かにジャカルタの街の様相はとても変わったのですが…。

まず、久しぶりにジャカルタに来て感じた変化は、新しいビルやショッピングモールの数が劇的に増え、大都会ぶりに拍車がかかっていたこと。もっと昔のジャカルタを知る方に伺いますと、スティルマン通りあたりはもともと何もなかったところだったということです。だが、小生が1回目に駐在していた時代にはもう十分な都会になっておりまして、その時代から比べたとしても、更に開発が進んだと目に映りました。

9年前にも高級店舗が入るショッピングモールはもういくつか存在しておりました。ホテルインドネシア・ロータリーにあったプラザインドネシアのほか、ちょうどプラザスナヤンが最新スポットだったような時でしたでしょうか。

当時家族でよく買い物に訪れていたのですが、来ているお客さんは一見お金持ちそうな人達ばかりだったように記憶しています。派手な色使いのぴちぴちパンツを無理に履きこなした太めの中華系のおばちゃん。白衣を着たベビーシッターを引き連れて闊歩するお金持ちそうなインドネシアのおばちゃん。おばちゃんばかりではなかった筈なのですが、どうもそんなイメージが残っているのです。偏見かもしれませんが。

そして、この度久々にジャカルタに来ましたら、そんなショッピングモールが更に増えており、当時あつ

たものより格段に規模が大きいグランドインドネシアやパシフィックプレイス(写真⑥、内部と外観)、挙げたらきりがありませんが、あちこちに乱立していました。そんなに似たようなモールばかりがががん作ってどうするのかと思ったほど。



そして、そんなに乱立しているのにもかかわらず大体どこのモールにも大勢のお客さんがいて、しかも来ているお客さんは、以前と違って普通の人達が多くなっているように感じます。人口1,000万のジャカルタには様々な暮らしをしている人達がいいますから、普通と言うのは少々語弊がありますね。中間所得者層と呼ばばよいのでしょうか。

小生がこちらに来る前からインドネシアの経済発展に関しては聞いていましたので、「ああなるほど、確かに発展している」と確認したとも言えます。こういうものを間近に見ることが、発展を肌で感じるというのかもしれない。やはり、新鮮な驚きがあります。

他に親しみやすい事例では、日本食レストランの数が



増えているということでしょうか。丸亀製麺(写真㊸)、富士そば、大戸屋、CoCo 老番屋などの日本の外食チェーンのお店もどんどん出ています。駐在員としてもありがたい話なのですが、これらの店の対象顧客は必ずしも日本人駐在員ではないようなのです。丸亀製麺などは、日本より少し高い単価で売られているのにもかかわらず、インドネシア人のお客さんで一杯です。当地の生活物価からしたら、少々お高い筈なのですが。

また、街を走る自動車。9年前はボロ車もまだけっこう走っていて、懐かしく思う方もいらっしゃるかもしれませんが、サスペンションが生きているのかどうか疑わしい真四角のKijang、黒煙を巻き上げながら走る古いバス、それに交じって時々高級車が走っている。そんな風景だったと記憶しています。今では日本の自動車メーカーが頑張っているお蔭もあってか、きれいな車ばかりです。Kijangもすっかりかっこよくなりました。車の販売台数も年々増え2012年に年間100万台を突破し、さらに増え続けているのだとか。



このように随分と変貌を遂げたインドネシア、と申しますか、変貌したジャカルタですが、車やバスなど

(バイクを利用したオジェック、少なくなりましたが三輪自動車のバジャイ)が市民の足の中心になっているのは相変わらずで、渋滞が問題になっています。車の数が激増、ショッピングモールなどの施設も増えて、渋滞具合は益々ひどくなっているのではないのでしょうか。

でも実は、ジャカルタの渋滞問題は今に始まったことではなく、私の1回目の駐在の時に渋滞緩和策として、道路にバスレーンという特別な車線を設けて走らせるバス、ジャカルタトランスや、目抜き通りの「スリーインワン」(車に3人以上乗っていないと通行できない制度)ができたのですから、ずっと言われ続けていることです。

勢いよく発展し、車の数もショッピングセンターも増えました。最低賃金も毎年がagan上がって中間所得者層も増えました。でも、根本的な生活スタイルはそのまま相変わらず「渋滞、渋滞」とぼやいている。これ、政府だけのせいなのでしょうかね。

確かに渋滞には困っているようですが、もともと“時間感覚”がおおらかなインドネシアの人達が、私たち日本人と同じレベルでこれをストレスに感じているのだから



うかと考えますと、どうやらそうでもない。そのあたりの感覚は相変わらずのように感じるのです。街の発展具合に対して、交通などのインフラの整備が追い付いていない理由の根本は、こんなところにあるのではないかと思います。

長々とここまで書いてきましたが、「9年の時を経て、何が変わったと思いますか？」という問いの答えです。

「見た目」から、個人的な印象を述べてみました。またしばらく駐在を続けましたら、あるいは違った答えが見えてくるかもしれません。

これから、どう変わっていくのか、それとも相変わらずなのか…。とても楽しみです。

(最終段落のカット写真、㊸はSEIBUの社屋前。㊹は街の夜景)

寄稿

Apa & siapa

私のフォーチュンクッキー

澤田 宏次 (1984 卒)

この手記が皆様の目に触れる頃は、我らが学び舎の山沿いにあった勝尾寺にも春遠からじ、といった時期でしょうか？ 恐らくそんな季節感を味わうことも無く、私は熱帯の国シンガポールで好物のチキンライスを食べているのかも知れません。この4月で海外生活18年目を迎えますが、振り返って見た自分の人生は、何かがいつも“少し違った”ものでした。

私は、1984年に卒業し、某都銀に入社しました。スタートとしては、異例の外国為替課配属。卒業後、本格的に海外との関わりを持ち始めた原点です。その後本部センターを経験後、91年には念願の海外勤務になりましたが、やった！と思いきや、辞令は私が恐れ多くも希望していたNY ウォールストリートではなく、JKT スデイルマン通り。しかも時は湾岸戦争が勃発後間もない時期。多国籍軍が開始した砂の嵐作戦から1ヵ月も経過していない中で、他の人の出張は回避なれど、私の赴任は決行。日本のナショナルフラッグキャリアでは追撃の危険性があるという理由で、成田から私が搭乗したのは、かのガルーダ航空で、しかも通常時より高い保険金を会社にかけてもらうというなんとも微妙な船出(?)となりました。

勤務そのものとはもかく、若かったこともありインドネシアの方々と議論を熱くしすぎたようでした。一時帰国など長期不在のタイミングを狙って、よく「アイツを早く帰国させろ」といった直訴がスタッフからあり、上司から休み明け早々呼び出しを受け「おまえはインドネシア人が好きか？」とよく問われて回答に窮した事を思い出します。自分ではよかれと思ってやっていたことが、当時は若かったゆえにボタンの掛け違いがあったようです。

そして忘れもしないスハルト政権崩壊に繋がる98年、自分の息子をはじ



め多くの駐在員の多くの子女が当時通っていたジャカルタ日本人学校の周りで暴徒の騒ぎが起きました。帰宅できずに学校に泊まらされることになった生徒の親御さんたちと、眠れぬ一晚を過ごしたのが緊張のピークで、当時あまり意識していなかった異国での生活の怖さを改めて知らされたものでした。

その後、国内の支店に戻り、国際業務部というお客様の海外展開をサポートする部隊に所属していた自分を、今度はインド拠点の総支配人が私を一本釣り。合併があったゆえに、苦もなく拠点の1つとなったニューデリー支店に勤務となったのも想定外でした。生活が厳しいインドの拠点では、静かなはずの本部でべらべら関西系標準語をあやつる私のようなストレス耐性がこれからは必要という理由だったと、あとで聞いて笑いました。かくして合併前の銀行の出身としてはじめてインド拠点の営業として送り込まれたわけです。流石にここのキックオフはハードル高く、赴任後間もなく体調を崩したときに本部の人間が異口同音に「あ

いつが病気になるくらいだから、やっぱりインドは手強い！」と別の意味でインドの評価をあげてしまいました。今までの駐在と少し違ったのは本当にインド駐在の方全員の結束が固かったこと、年代を超えての友人が多数出来たことでしょうか。我ら日本からの駐在員は一致団結、官民一体となってインドにラブコールを送りつけました。まさしく民間外交です。



ソロに旅行した際の家族写真=1994年夏

話題のインドネシア映画「Laskar Pelangi」の撮影現場
(ブリトン島)に行ったときのショット=2012年12月



らう、ある意味重要なプロジェクトにも参画しています。彼等には想定外のことを、今度は私が求めている場面が多数あります。彼等は、私にとって実の息子と同じくらいの年齢で、夢と希望に溢れています。

インドネシアではGPP(nggak apa-apa)、インドではNon problem と日本人である私たちがなかなか容易に口にしないこの言葉を笑顔で話すのを聞いて、当時は腹立たしさを覚えすらしましたが、別の見方をすればこの言葉を発することで出来る、計り知れない力もあるのではないかと、感じるようになりました。

最近ジャカルタでは日本のAKB48の姉妹グループJKT48が流行っています 彼女達も最新ヒット曲で次のように歌っています

「♪♪Yang mencinta Fortune Cookie, masa depan tidak akan seburuk itu, “hey hey hey hey hey hey” mengembangkan senyumankan membawa keberuntungan#」

箕面の山であり真面目に勉強しなかったにもかかわらず、結果としてその後の人生の半分をインドネシアに関わり、またそのおかげでインドにも関わるなど、少し



ずつ私の想定していたものとは違った人生ではありましたが、これ

から続く未来もそんなに悪くないようです。フォーチュンクッキーとは「おみくじクッキー」のこと。笑顔でいればツキがまわってくると信じて、もう暫く美味しいチキンライスを求めてホーカーを探してみたいと思います。
(④はシンガポールでの再会。前職銀行の社員旅行一行と=2014年1月)

全権大使と一緒に、官民一丸で投資を、整備を、いかにすすめるかを念頭に入れて行動していたのですが、今年1月に訪印された現首相の安倍氏が、第1次政権時の2007年に初めて来印されたのがちょうどそんな頃。当時のことが昨日のように思い出されます。永田町は全部終わったので、あとは二重橋だけだと大使と共に東奔西走した“戦友”との毎日も懐かしいものです。

それからは大阪の門真に戻り、銀行員としての夢であった職を、海外組として帰国後直接就かせて頂いたことは予想外に有り難い限りでありました。そして現役最後のお勤めは再びインドネシア。さあ、国内で就いた職をジャカルタで?と sombong にも思って大きく勘違いしていた私が手にした辞令は、グループとして買収した華僑系銀行の経営立直して銀行代表としての赴任でした。インドネシアといってもジャカルタから3時間程度車で行ったインドネシア第3の都市バンドンでの勤務。そこでの経験は公には書けない事も含めて本当に勉強になり



ました。日本のそれとはレベルの違うコンプライアンスに東京との板挟みになりながら苦悩した毎日。合弁会社ゆえに、同じ日本勢でも、利害関係が違うグループ会社との意見調整に疲れきったこと。一方で魑魅魍魎とした世界で戦い、タフな責務ではありましたが、そこでの1,300名を超える従業員その家族の皆さんの幸せも自分の双肩にかかっていると常に意識し踏ん張ったのが、昨年5月までの3年間でした。前回のジャカルタ駐在では若さ故の小さなトラブルもありましたが、それも経験でした。インドネシアの方々より深く理解し合い、大変心温まる交友が出来、誠にありがたいことだったと今でも感謝しています。(写真は、初赴任した合弁銀行の元仲間との懐かしい17年ぶりの同窓会=2013年2月)

そんな私もその後は銀行を一旦退職し、専任銀行職員として日本の中小企業の皆様の事業ご展開のお手伝いをさせて頂くチームに所属して、シンガポールにいる訳です。でも、ここではインドネシアの若いバンカーを、日本企業の皆様にご満足頂くレベルまでに共に成長しても

特別寄稿

Apa & siapa

HIDUP MANDIRI DI JEPANG

Feranisa Prawita Raras (2013 修士課程終了)

Jepang sangat terkenal dengan biaya hidup yang tinggi, termasuk juga upah tenaga kerja yang relatif mahal. Sebagai contoh, jika Anda bekerja paruh waktu sebagai pelayan toko di convenience store, Anda bisa mendapat 700-1100 yen per jam tergantung lokasi toko dan waktu kerja.

Saya pernah bekerja paruh waktu selama dua minggu pada saat liburan musim dingin di kantor pos selama dua tahun berturut-turut. Tahun pertama, saya ambil shift waktu bekerja mulai jam 10 malam sampai 6 pagi, dengan imbalan di atas 1000 yen per jam. Tahun berikutnya, saya tidak ingin memaksakan diri. Demi menjaga kondisi tubuh dan jam biologis, saya ambil shift jam 5 sore sampai 10 malam. Tentu saja imbalannya tidak sebesar saat bekerja tengah malam.

Begitulah, di Jepang, semua serba mahal termasuk upah tenaga kerja. Dari sisi perusahaan, tentu saja perusahaan ingin menekan biaya operasional dan biaya tenaga kerja seminimal mungkin. Saya bekerja di kantor pos dengan tugas memilah kartu pos tahun baru untuk dikirimkan ke setiap rumah tepat tanggal 1 Januari pagi. Sebenarnya, ada mesin sangat besar dengan kemampuan memilah ribuan kartu pos per menit, mesin itulah yang mengerjakan pemilahan kartu pos. Pekerjaan kami waktu itu hanya memilah kartu pos yang tidak bisa terbaca oleh mesin, yang jumlahnya mungkin tidak sampai 10% dari total keseluruhan kartu pos yang harus dikirim.

Dalam keseharian, banyak pekerjaan sederhana yang digantikan oleh mesin secara otomatis, atau dikerjakan oleh orang yang membutuhkan tersebut tanpa pelayan. Vending machine yang sangat banyak tersebar di setiap sudut adalah satu contohnya. Tidak ada warung kaki lima atau pedagang kelontong untuk minuman dan rokok. Demikian juga dengan restoran fast food dan kantin, tidak ada pelayan yang akan membereskan meja setelah Anda makan. Anda harus membersihkan meja sendiri dan mengantarkan piring, gelas dan baki kosong ke tray return.

Di Jepang Anda tidak akan pernah menemui petugas loket parkir dan tukang parkir. Anda memarkir mobil tanpa panduan. Untuk mobil terbaru dan canggih, ada kamera untuk memudahkan pengemudi memarkir mobil. Sama halnya dengan petugas pom bensin yang hanya bekerja di jam kerja normal, karena setelahnya Anda adalah sebagai pembeli yang melayani diri sendiri. Petugas jalan tol pun hanya tersedia di satu gerbang karena hampir semua gerbang menggunakan automatic gate yang disebut ETC.

Saat menggunakan transportasi umum seperti bus kota, tidak ada kondektur yang menarik ongkos transportasi. Untuk bus antarkota, Anda membeli tiketnya terlebih dahulu dengan memesan via internet, sementara untuk bus dalam kota, Anda membayar ongkos dengan memasukkan uang ke kotak ongkos yang



ditempatkan di sebelah supir bus. Di stasiun kereta, tidak ada petugas loket karcis, begitu juga dengan petugas yang mengecek karcis. Anda membeli karcis melalui mesin, lalu memasukkan karcis ke pintu otomatis di stasiun.

Kembali ke rumah setelah lelah seharian beraktivitas di luar, baik bekerja atau belajar di kampus, Anda masih harus dihadapkan dengan setumpuk pekerjaan rumah tangga. Tidak ada pembantu rumah tangga yang akan membersihkan rumah, menyapu, beres-beres, memasak, mencuci dan menyeterika baju. Jika Anda sudah berkeluarga dan memiliki momongan, tidak ada bantuan baby sitter yang membantu Anda menjaga dan merawat anak. Para orangtua yang bekerja biasanya menitipkan anak-anak mereka di daycare dengan biaya yang tidak murah.

Kebetulan saya bekerja di perusahaan yang menjual perabot rumah tangga dan furnitur. Beberapa furnitur yang simpel didesain khusus agar bisa dirakit sendiri dengan mudah oleh customer. Sebagai contoh, jika Anda membeli rak TV sederhana dengan harga 3,990 yen, Anda butuh 4,000 yen untuk biaya perakitan. Tentu hampir 100% customer saya memilih merakit sendiri daripada membuang-buang uang dengan percuma. Untuk furnitur besar, ada sistem peminjaman truk mini (semacam mobil pick up di Indonesia) bagi customer yang bisa mengangkut barang belanjaan sendiri. Membeli sofa besar atau tempat tidur dan spring bed tanpa punya mobil pick up bukan halangan untuk membawa pulang sendiri. Sebagai insentif, selain peminjaman truk mini gratis, ada potongan diskon 5% bagi customer mandiri yang membawa barang belanjaan sendiri.

Saya kembali belajar: belajar menjadi mandiri sejak tiba di Jepang. Bukan hanya mandiri mengurus diri sendiri, tapi juga mandiri melakukan apa saja sendiri. Saya tidak pernah membayangkan mengerjakan semuanya sendiri saat berada di Indonesia. Pengalaman hidup di Jepang adalah pengalaman hidup mandiri yang sangat berharga seumur hidup. Hanya di Jepang lah saya bisa merasakan bagaimana menjadi pelayan bagi diri sendiri, bahkan bagi orang lain.

Tentu saja, di Indonesia saya juga bisa lebih menghargai keberadaan orang-orang yang membantu memudahkan berbagai pekerjaan: pelayan toko, pedagang kelontong, pembantu, baby sitter, tukang parkir, kondektur, penjaga loket, petugas jalan tol, petugas pom bensin. Dengan keberadaan mereka, hidup terasa jauh lebih mudah. Namun, tanpa keberadaan mereka, kemandirian terasah tajam. Ya, saya harus berterima kasih dan bersyukur karena segalanya adalah pembelajaran hidup. Hidup terlalu singkat untuk dilewatkan tanpa mencoba berbagai hal sederhana yang mungkin tidak akan pernah dicoba jika lingkungan terlalu memanjakan diri.

消息

ひとこと (敬称略)

FACEBOOKで繋がる



30年ぶりの繋がりが“増殖”しています。2年前に始まった1984年卒業の先輩方の集まりが、FACEBOOKで1人繋がり、2人つながりと84年から上に下に繋がりが増えているのです。最近、FACEBOOKのグループページも作っています。

現在グループメンバーは32人になって(海外・関西

の方も含む)、海外から一時帰国の方、関西から出張の方が東京に来られる時、季節の節目など気軽に集まっています。

2013年11月の集まり(写真⑧)では70年代卒業の先輩方も参加され、年代も少しずつ広がっています。2014年2月(写真⑨)の新年会も初参加者が2名、卒業以来の再会に、サテをつまみにビンタンビールとアラクを飲みながら遅くまで盛り上がりました。

都合のつく方々が気楽に集まっていますので、関東在住の方、関東に出張、一時帰国される方々、私にFACEBOOKで友達申請していただければ、グループに登録させていただきます。FACEBOOKされてない方も、下記にメールをいただければ、情報発信させていただきます。

大島庄次=86卒=(oshima-vn@sumiso-asia.com)



佐藤義章(44卒)=東京都狛江市
馬齢を徒らに重ねて95歳。振り返ると、実に長く生きてきたものだ。

東郷芳温(44卒)=東京都千代田区
満89歳。外事専門学校2年半で陸軍特別操縦見習士官を志願、100時間しか飛べなかった特攻速成教育を受け、台湾で終戦。第17号にあるインドネシア語の意味も分からず、音読だけを楽しみました。インドネシアの将来は急成長、我らのクラスは25名でした。今、定員がたった10名とは。

奥田忠志(50卒)=兵庫県西宮市
前号の会報でお知らせした胃がんは、抗がん剤の点滴で小さくなりましたが、13年7月にC型肝炎による肝腫瘍2つが見つかり、手術を受けました。経過は良好です。「余生を明るく」頑張ります。

大谷昭三(50卒)=北海道小樽市
「定員」問題の進展について、北の空から祈っています。

長谷泰行(50卒)=大阪府箕面市
カラチ(パキスタン)に1年。バンコックに3年とインドネシアとは関係なく、専ら英語で切り抜けた。

原 勝利(50卒)=千葉県佐倉市
妻の介護の毎日ですが、元気です。

服部英樹(56卒)=三重県四日市市
13年11月にオーストラリアのシドニー南西130kmの田舎町の日曜ミサで、インドネシア出身の信者の皆さまに“Anugerah Cinta Bali”を歌唱指導する機会がありました。

中村英男(58卒)=大阪府吹田市
いつもお世話様。皆様方のご健康を祈念しております。

山口 寛(58卒)=大阪府枚方市
アチエ募金活動が契機となって2005年に創刊されたこの会報が、早いもので今回が18号に。毎号素晴らしい誌面づくりに腐心いただいている編集長はじめ関係者の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

前田正一(59卒)=神奈川県鎌倉市
相変わらず環境関係の仕事と横浜でのボランティア活動をしています。

西田達雄(60卒)=東京都調布市
インドネシア語専攻定員増に向けて、大学側英断を心から願っています。同時にインドネシア語専攻生や若き後輩にはインドネシアを結ぶ大きな夢に向けて大きく前進あれ!!

小原一浩(63卒)=大阪狭山市



14年ぶりに米国に行きました。今回は市の姉妹都市提携40周年記念式に参列。帰途、ハワイに。写真はワイキキのサンセットです。人生、健康で生きているだけでめっけもん。

渡辺重視(64卒)=大阪府豊能郡
当方は、リハビリを継続中です。

沖 政夫(66卒)=兵庫県神戸市
会報を読んで皆さんの活躍を知り、元気をもらっています。

加納建子(70卒)=富士山麓にて



13年9月、東京から転居。仕事をリタイアした主人のかねてからの希望でもあった田舎に引っ込み、隠棲生活をしています。翌月19日、富士山の初冠雪をベランダから見、iPadminiで撮りました。

廣澤義幸(76卒)=大阪市

前号の坂口氏の言う「インドネシア社会」の「ひずみ」に注目しました。平岡 毅(94卒)=滋賀県大津市
陸上マスターズで短距離を続けています。今年も110mHで近畿大会の大会記録更新を狙っています。

里 真吾(02卒)=大阪市

現在スマトラ島で日本語教室を開いています。

◆おくやみ申し上げます◆

佐伯 勝(47卒)=東大阪市

13年1月19日逝去